

清掃活動の意味づけと目標

島本政志

前回、学校としての優先順位を決めること、共通理解することがはじめにすることであると書いた。では掃除はどうか。子どもたちに毎日取り組ませる掃除である。末期的に荒れた学級では「きちんとさせる」ということが最優先の課題にはなり得ない。掃除は大切ではあるが、優先度は低い。「安心・安全」こそが最優先課題なのである。

多少、ごみが落ちていても構わない。それは担任や支援に入った教師がすれば済む。実際、1年間そうしてきた。では、この清掃活動の時間をどう教師は意味づけて活用すればよいのか。

1. システムが機能しない。

「では、さぼる子がいなくなるにはどうしたらよいのか。最も大切な原理は次である。

Point 1人1役にする

複数の人間を同じところで掃除しているから、何人かさぼってしまうのである。

1人にたった1つの明確な仕事を与えればよい。1つの仕事をやったかどうかをすぐに分かるし、その責任者もわかるからだ。もし黒板掃除をしていないのなら、その責任者である1人の子がもう一度やり直しになる。『学級づくり スタートダッシュ』の「大前政

1人1役のシステム。さぼる子がいないようにするためのシステムとして紹介されている。

続けて、早く終わった子に対しては「早く終わったら、その分読書の時間などに使えばよいのである。」と解説している。私の教室。

「1人1役」にしたが、ほとんど機能しない。掃除場所に遅れながらも来て、それなりに掃除しているのは10人前後

である。

班で掃除に取り组ませることも難しい。互いに協力することができないためである。私は、おそらく、やらない者が出てくる、1人1役のシステムはあまり機能しないだろうと思いつつも、がんばろうとしている子を認め、褒め、ねぎらうために1人1役のシステムを採用した。

では掃除をしない子は何をしているかというと、そもそも掃除場所に来ない。所在不明である。だから、「ここ、もつとこうした方がいいよ」といった注意や助言をする機会自体が存在しない。

「体育館の壁に蜂の巣を見つけた」と言って、他のクラスの子も含めて10人以上集まっている。石を巣や体育館の壁にぶつけている。

当たり前だが

授業妨害、エスケープをしている人間が掃除だけは一生懸命取り組むなどということはありません。

しかし、1度も来ないかという、そ

うではない。1回か2回は来る。アリバイづくりのためである。

「全然掃除してへんやないか。」と言えば「はあ？ やったときもあるやろが。」

と返すことができるからである。

また一度でも掃除をすれば。親が「あんな、ちゃんと掃除してるんやろな？」という問いかけに対して、「うん、やってるで。」と返事するためだ。

しかし、実際は教師や学級のだけれかが目の前で自分の掃除場所を掃除していても意図的に掃除に参加しない。学級のシステム破壊である。

2. どう対応したか。

掃除場所はこちらが前もって決めてやる。

「○○くん、君のお母さんもお父さんも君にがんばってほしいと話し合いで言ってたやろ。せやから、君のがんばりを見るためにも教室の廊下でがんばってくれへんか。」

「なんでやねんな？」という返事だが、譲らない。「まあ、やってみいや。それで

できたら次の掃除当番決めの時、好きなんやったらいいんや。」と伝える。ポイント**は教室の掃除を任せない**ということである。掃除はやらないので、任せると穴が空く。他にもやらない者、場所に来ない者が多数いるので、担任や他の子たちだけではフォローしきれない。結果的に**5時間目**が始まっているのに机がまだほとんど整っていない状態になってしまう。

3. システム機能のためのレイイネス

ある子は自分の場所をやり終えた。私と言う。全く来ない子たちの掃除をやりながら「すまん。自分のところもやった後で悪いんやけどAのところもやってやってくれへんか。」

「なんでやねんな？ 自分のところちゃんとやってんやから、もう終わりや。」

この子の言い分をどうとらえるべきか？ 一人一役のシステムに必要なレイイネスは何か？

4. 関係づくりの時間に。

前掲書には、「もし黒板掃除をしていないのなら、その責任者である1人の子が

もう一度やり直しになる。」と書かれている。つまり教師の存在は**チェッカー**として機能している。

しかし、荒れた教室では教師による**チェックが機能しない**。教師が「できてないよ」と言えば、「できてないと思うんなら、お前がやれよ。おれはできてると思うから。」と言う者もいる。

では、どのようにすればよいのか。それは掃除をしていた子に対して褒めるという評価する、されるの関係ではなく、フラットな関係で「ありがとう」といった言葉で教師の思いを伝えることだ。

掃除の完成度、達成度を目標にしない。汚れが残っていても、「すまんあ、おかげできれいになったよ」といつて感謝を伝えたい。自分のところが完全でなくても「先生、○○のところ手伝ってええか？」と言ってきた優しい子を「まず、自分のをやれ」とは言いたくない。優しい思いを潰してはいけない。荒れた教室に圧倒的に不足しているのは、「優しさ」である。